

◇ 初山(二上山) … 俳句の季語に、山始・初山と云うのがある

一月十日(火)

二〇二〇年一月二日の初登山(二上山)以来、二年振りの初登りはやはり二上山から…。不整脈が出て久しく岳にご無沙汰している。脚力を考慮して、雌岳から雄岳縦走のルートを選んだ。(距離も何時もの半分…)。

近鉄当麻寺駅から当麻寺・山口神社・大池・鳥谷口古墳・谷路を祐泉寺・聖水の谷は水が涸れ、馬の背には登かず「あやしやたれか…」の碑まで行つて後戻り岩屋峠への谷路を登る・岩屋から雌岳の九十九折路を・雌岳・馬の背・雄岳・大津皇子山陵から二上山駅に降りる。



山口神社の赤い鳥居



傘堂



大池の鴨



二上山を背に鳥谷口古墳

参道を行けば字童帰り来る正午を過ぎて当麻寺へと
草団子売る店ガラス戸叩く風連休明けの道閑散と

成人式が昨月曜で三連休

仁王門修理の覆い被されて背二上山磴の上の堂

当麻寺の正門

竹の坊扉の内なる柿の木に騒ぎ群るらし寒雀どち

二上山燃ゆが如きながら中将姫織る浄土曼荼羅

当麻寺に飛驒の匠か目を見張る傘をさすがに方丈の堂

傘堂：山口神社の杜の西大池を前に二上山が：

麻呂子山麓の山口神社の朱の鳥居崇む近郷十六ヶ村 首席・大橋・西・中・染野・今在家・勝根・市場・岡崎・大中・有井・神樂：

参道の木洩れさす杜息白し鳥の遠鳴き踏む砂利の音

二上山の大池に群る鴨の水脈大津皇子の墓とも鳥谷口古墳

注、七世紀後半の方7・6畝の方墳。横口式石櫛で、底石・側石に石棺の未成品を再利用、皇子の立場や造営時期が今日致

山路来て二上山の聖水の谷をどよもすせせらぎの音

注、藤原氏、中臣氏の祖は遠く天忍押雲根命に遡る。中臣清親が近衛天皇の康次元(1142)年の大嘗祭に捧げた「中臣寿詞」に、「遠い昔

の日、み子さまのお喰しの飯とみ酒を作る御料の水を大和國中隈なく探し求めた。その頃国原の水は臭く土混り、日のみ子さまのお喰しの料に叶わず、中臣の祖押雲根命に天の水湧き口をこの二上山に八とろまで見とどけ、その後久しく日のみ子さまのおめしの湯

水は代々中臣自身、この山へ汲みに来た。」「内は、折口信夫氏の『死者の書』によった。

宝珠持つ手を合すのに蓮担ぐ地蔵二体山の辺の上

谷側の山路は総て柵閉さす何処下らむ不動の小滝

谷川に降りると不動の石像があったのだが：

祐泉寺山にかかれば聖水の涸るる谷の碑「あやしやたれか」と

注、祐泉寺から馬の背へ聖水の谷へ、山門をくぐり谷沢を少し上ると右岸の磐に石柱があつて、

『南無阿弥陀 佛の御名をよぶ小とり あやしやたれか ふたかみの山』と刻られている。

五木寛之氏の『風の王国』に詳しい。



祐泉寺へ、右手に山門



聖水の谷の入り口の碑



潤れた水場



岩屋峠から雌岳の上り口

寺の脇散り尽し埋め尽くす道紅葉踏み上く谷沢の音

ここ二二年この沢道に分かれゐて整備さる道岩屋路登く

聖水か笕を流る石清水一気に落ちてせせらぎに和す

大き竹渡せど雫一滴の水場そそくさ岩屋への路

谷を出で岩屋峠の日の眩し冬うらうらと雌岳を見上ぐ

階を避けて土坂選び上く赤き山茶花九十九折れ路

重なりし峠の先の二つ峯降り来る人熊避けの鈴

今はここを含めて水飲み場は四か所

岩屋の谷にある二つ目の水場、馬の背に上る谷にも二つ

二上山・雌岳(474.2m)

振り向くと竹之内峠の向うに葛城山に金剛山が近い

風もなく冬日にかすむ畝傍山遠くに見えし雌岳頂上

山茶花の傍万葉の歌碑に寄る石の日時計十四をさす

注、『大阪をわが越え来れば二上に黄葉流る時雨ふりつ』(◎2185)



竹之内峠の向うの葛城金剛



雌岳の万葉の歌碑



影が一四をさす日時計



霞む畝傍山

馬の背に下れば冬の日のうららママに手ひかれ児の登り来る

過かの時は張出す磐いにつらら垂れストック突きし今木階段

雄岳みちへの桜落葉の磐追急みちぐ花咲く頃にまた訪ね見む

枯れ薄桜の花芽堅く閉みづ雄岳みちうらうら大津皇子みちの山陵

注、姉大来皇女の万葉の歌の題詞に、「大津の皇子の屍を葛城の二上山に移し葬はぶる時大来皇女の哀しび傷いたむ歌」とあつて、こを皇子の山

陵とする唯一の基となっている。

二上山・雄岳(517呎)

『うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む』(2165)

大津皇子の墓遠巻き下る落葉山路丁石二つ枯るる熊笹

朱の檜の実踏みしだかれし尾根路行く畝傍は遠き冬日に霞む

傍山の端に半ば夕日の沈みゆく枯山越しの赤き光彩



馬の背より雄岳への路



大津皇子二上山墓



山頂より二つ目の丁石



二上神社と二上山駅への分岐